

## 8月29日

### プログラム テコンドー体験

訪問先都市	ソウル
面会者	ジン・サンウン (Jin Sang Eun) 師範
プログラム概要	テコンドーは、多彩な蹴り技が特徴的な韓国の国技である。体験では、韓国式の挨拶の仕方や基本動作、足の運び方等を丁寧に指導していただいた。また、「跆拳道」という言葉の漢字一つ一つに込められた意味を聞き、韓国の礼儀を重んじる一面に触れられた。体験の最後には、団員全員が各自の目標を書いた木の板を拳で割ることに成功し、歓声が上がった。

### 訪問先 三洞少年村

訪問先都市	ソウル
面会者	ヒョン・ジェウ 園長
訪問概要	三洞少年村は、朝鮮戦争で親をなくした子供たちのために設立された施設であり、現在は乳児から高校生まで64人の親をなくした男子が生活している。園長に施設内を案内していただいた後、2班に分かれ、日本のお菓子作りと施設内の清掃ボランティア活動を行った。その後、日本文化の紹介として、歌とソーラン節を披露し、日本のお菓子を食べながら児童たちと交流した。

### プログラム ナンタ公演観覧

訪問先都市	ソウル
プログラム概要	NANTA (ナンタ) は、韓国の伝統的のサムルノリのリズムに合わせてキッチンで起こる出来事をコミカルにドラマ化した、老若男女誰もが気軽に楽しめる韓国初の非言語公演である。調理器具を楽器にしてパフォーマンスをしていて、とても新鮮だった。会場を一体化させる観客を巻き込んだ演出がすばらしかった。

## 8月30日

### 訪問先 女性家族部

訪問先都市	ソウル
面会者	イ・グムスン (Lee Keum Sun) 青少年活動振興課長 チョ・ソンギョン (Cho Sun Kyoung) 青少年活動振興課行政事務官 チョ・ヨンギョン (Cho Yeon Kyung) 青少年活動振興課主務官／課長代理
訪問概要	女性家族部は、女性の地位向上と家族や青少年に関する役割を担う国家行政機関である。今回の表敬訪問では女性家族部の概要説明の後、質疑応答及び記念撮影を行なった。本事業は女性家族部の支援無しでは成立しないことを再認識するとともに、日本青年代表として私たちに期待されていると感じ、改めて身の引き締まる思いがした。表敬訪問の後、女性家族部主催による昼食会が開かれた。

## 訪問先

## 大韓民国歴史博物館

訪問先都市	ソウル
訪問概要	大韓民国歴史博物館は2012年末にオープンした韓国初の国立近現代史博物館である。19世紀末の開港期から現代まで、韓国の歴史を分かりやすく学ぶことができる。展示は工夫が凝らされており見飽きなかった。また、貴重な展示品の数々はどれもその時代を物語り、韓国の歴史への理解を深めることができた。

## 訪問先

## 在大韓民国日本国大使館公報文化院

訪問先都市	ソウル
面会者	宮田 起三弘 副院長／一等書記官 篠田 智志 一等書記官
訪問概要	在大韓民国日本国大使館公報文化院は、1971年以来韓国で日本文化や日本の最新情報を発信している日本大使館の一機関である。若者を中心とした継続的な日韓交流を始め、SNSを使った広報や日韓両国の文化を体験できるおまつり等、工夫を凝らした企画をたくさん行っている事が分かった。私たちもこの事業を通じて、韓国をよく知りながら草の根レベルでの交流の一端を担いたいと思った。

## 訪問先

## 韓食文化館

訪問先都市	ソウル
訪問概要	韓国に古くからある食文化についての展示を見学した。日本にもある調味料でも、その作り方が日本のものとは違っていたり、日本にもある年中行事についても食べるものが異なっていたりすること知り、また、食材や料理、その手法や食べ方にはそれぞれ意味があることが分かった。韓国特有の食文化を通して韓国人の信仰や考え方を垣間見ることができた。

## 8月31日

## 訪問先

## 国立中央青少年修練院

訪問先都市	天安
面会者	パク・チョルン (Park Chuer Ung) 院長 イム・ユンギ (Lim Yoon Gi) 本部長 ハン・シンヒ (Han Shin Hee) 部長 アン・ジョンベ (An Jong Bae) 部長 イ・ウンスク (Lee Eun Sook) 部長 キム・ビョンチャン (Kim Byeong Chan) 部長 イ・ソンジュン (Lee Seong Jun) 部長 ジョ・ヒョンジン (Jo Hyeon Jin) 青少年指導専門家
訪問概要	国立中央青少年修練院は、青少年が様々な分野で活躍できるように、彼らの強い心身を育てることを目的とし、国が2001年に設立した施設である。表敬訪問では、和やかな雰囲気での質疑応答が行われ、韓国の青少年活動について詳しく知ることができた。また、その後のプログラム体験活動ではK-POPに合わせた太鼓(モドゥンブ)演奏を体験し、良い経験となった。

## 9月1日

### 訪問先

#### 独立記念館

訪問先都市	天安
訪問概要	独立記念館は天安に位置し、1987年に国民たちの募金により設立された韓国の自由と独立へ向けての歴史を展示した記念館である。ガイドの方のお話や様々な展示を通して、韓国と日本の間にあった出来事は私たちが知っていなければならないことであると痛感させられた。

### 訪問先

#### ヘマルグム (明るい) センター

訪問先都市	大田
面会者	チョ・ジョンシル センター長 チョ・ヨンブ 部長
訪問概要	ヘマルグムセンターは、校内暴力のために学校へ通えなくなった中高生を支援するため、廃校となった小学校を利用して開かれた韓国唯一の施設で、30人の生徒が寄宿生活を送れるようになっている。センターの概要説明を受けた後、お互いにパフォーマンス披露を行い、また、ゲームや夕食を共にしながらセンターの生徒と交流した。

## 9月2日

### 訪問先

#### 韓半島統一未来センター

訪問先都市	漣川
面会者	イ・スンウォン (Lee Soon Won) 統一部企画課主務官 カン・ヨンジョン (Kang Yeon Jeong) 統一部企画課主務官 アン・ジュンシン (An Jung Sin) 統一部企画課主務官
訪問概要	韓半島統一未来センターでは、韓半島分裂の歴史を学び、韓半島が統一された未来を体験した。また、南北の境界線から2kmの地点にも赴き、軍人の方から直接説明を受けた。韓半島の現在の状況と、統一に向けて努力がなされているということがよく理解できた。

## 9月3日～4日

### プログラム

#### 日韓青少年交流会

訪問先都市	ソウル
面会者	キム・ヒョンギョム (Kim Hyeong Kyeom) 青少年交流センター部長 キム・ヒョンウォン 平成28年度韓国青年招へい団団長 ソ・ヨンミン 平成28年度韓国青年招へい団副団長
プログラム概要	約40名の韓国青年たちに温かく迎えられ、一泊二日の日韓青少年交流会が行われた。アイスブレーキングや一緒に食事を取ることで、初めは緊張していた団員たちも徐々に打ち解けていくことができた。「文化交流の夜」では、日韓両国の青年たちが用意した発表を披露し合い、二日目はディスカッションを通して両国の事情や考え方の違いなどについて理解を深めた。

## 9月5日

### プログラム 韓国青年とのソウルグループ視察

訪問先都市	ソウル
プログラム概要	日韓青少年交流会に参加した韓国青年1名と日本人2名が1グループになり、グループごとに韓国青年の案内でソウル周辺を散策した。これまでのプログラムは、バスでの移動が中心であったが、このプログラムでソウル市内の公共交通を利用したり、街中を歩いたりする初めての機会となった。ソウルに暮らす人々の生活が身近に感じられ、様々な発見があった。

## 9月6日

### 訪問先 西大門刑務所歴史館

訪問先都市	ソウル
訪問概要	西大門刑務所歴史館は、日本植民地時代に独立運動家らが収容された刑務所を歴史館として公開している。実際に使用されていた監獄や死刑場などを見学することができる。拷問の様子を説明する資料は目を覆いたくなるようなものだったが、日本人として知っておくべき内容だと感じた。

### 訪問先 大元外国語高等学校日本語学科

訪問先都市	ソウル
面会者	ユ・スンジョン (Yoo Soon Jong) 校長 ウィ・ジュンホ (Wi Joon Ho) 国際部長
訪問概要	大元外国語高等学校は、英語や日本語を始めとする外国語を学ぶ学生たちが集う高校である。高校生による学校紹介や日本団副団長による本事業の紹介の後、互いの文化公演を通じて交流を深めた。その後、グループに分かれて日本語で日本紹介の授業を行った。

## 9月7日

### 訪問先 アモーレパシフィック・ストーリー・ガーデン

訪問先都市	烏山
訪問概要	アモーレパシフィック・ストーリー・ガーデンは、韓国を代表する化粧品会社であるアモーレパシフィックの工場に隣接している。アモーレパシフィックの沿革を映像や写真を通して学び、化粧品の原料に実際に触れたり、製造過程を見学したりした。アモーレパシフィックが社会と共に成長を続けている姿がよく分かる内容であった。

### 訪問先 水原大学校日本語日文学科

訪問先都市	水原
面会者	金善姫 (Kim Seon Hi) 日語日文学科教授/学科長 李成根 (Lee Seong Kun) 学生支援長/日語日文学科教授/文学博士 バン・ユンヒョン 日語日文学科教授/文学博士 チョン・ウォンジュン (Chung Won Jun) 法政学部言論情報学科教授/国際協力署 副署長/PR学博士 安河内 明子 助教授
訪問概要	水原大学校は京畿道華城市にある私立大学である。日本語日文学科の学生と文化公演をし、お互いの国に対するイメージの違いについて意見交換をした。その後、グループに分かれキャンパスツアーを行い、交流を深めた。

## 9月8日

### 訪問先 ソウル・エナジー・ドリーム・センター

訪問先都市	ソウル
訪問概要	ソウル・エナジー・ドリーム・センターは、ソウル特別市の新再生エネルギーランドマークかつソウルのエネルギー自立都市の宣言的な建物として2012年に開館した。ガイドの方の説明と共にパネルや体験ブースを回り、エネルギーが生まれる仕組み等を楽しく学ぶことができた。

### プログラム 歓送昼食会

訪問先都市	ソウル
面会者	キム・ソクピョン (Kim Seok Byung) 青少年交流センター事務局長 キム・ヒョンギョム (Kim Hyeong Kyeom) 青少年交流センター部長
プログラム概要	青少年交流センターの主催で職員の方々と昼食を兼ねた懇談を行った。和やかな雰囲気の中、今回のプログラムの振り返りを行った。

### プログラム 始興市ツアー

訪問先都市	始興
プログラム概要	ホームステイを受け入れてくださった始興市が誇る自然を堪能した。レンゲテーマパークでは、色とりどりの蓮の花を見学し、蓮のお茶を味わった。また、海水と淡水の両方に生息する動植物が生息する海溝生態公園では、塩田を見学し、カニやサギなどが生息している姿を見ることができた。

## 9月8日～10日

### プログラム ホームステイ

訪問先都市	始興
プログラム概要	2名または3名に分かれて二泊三日のホームステイを行った。キムチや韓国海苔巻きなどの家庭料理を教えてもらったり、子供たちと遊んだりと様々な経験ができた。ホストファミリーは家族のように接してくれて、忘れられない思い出になった。

## 9月10日

### プログラム 韓服体験活動

訪問先都市	ソウル
プログラム概要	韓服とは韓国の民族衣装である。団員たちはそれぞれが好きなデザインや色のものを選び、韓国語でチマと呼ばれるスカートの構造の違いなどを学んだ。その後、景福宮の前で記念撮影をした。

## 団長報告

団長 中田 昌和

### ◆はじめに

昭和59年9月の日韓両国首脳会談の際の共同声明の趣旨を踏まえて昭和62年に開始された本事業では、今回の派遣団が丁度三十回目のものであった。

その歴史、そして団を構成する三十人の一人一人を意識して、団のスローガンを「出会いに感謝・愛（カムサラン）～未来への三十奏～」と定めた。事前研修を通じて、皆でアイデアを出し、団内のコミュニケーションを深めながら決めたものである。実際、韓国での訪問活動中に、このスローガンを受入機関などの様々な方に説明する中で、自らこれを再確認し、団のミッション、オリジナリティをアピールできるものとなった。



団で制作したバッジ 30と♥をデザイン

### ◆派遣まで

オリンピックセンターでの事前研修では、初めて団を構成するメンバーが顔を合わせた。韓国について、語学力だけでなく、生活習慣や国民意識などについての理解が様々な団員たちであったが、日韓交流の担当である青年国際交流担当室の水野専門官の御尽力と、池田、長木両副団長や鄭、川嶋両渉外の硬軟兼ね備えた個性や、青少年活動、国際交流の経験に基づいた引き出しの多さに助けられ、わずか一週間という短い間に団としての基礎固めを行えた。

ただし、ここで係が決められて、それぞれの分担も決まっていたのだが、この分担と団全体との関係性について、機能別の係と共同体的な集団である「団」との関

係性について様々な困難にも立ち向かっていくこととなった。「報告」「連絡」「相談」ということも何度も出てくるのだが、特に、それぞれが地元に戻った事前研修後の自主研修期間中に、分散しがちな機能別の係と、団全体の問題として議論し定めていくという求心的なモメントを、顔を合わせない中でどう組み合わせしていくかは、やはりわが団においても難しいところもあり、これは、それぞれの団ごとに考えていかなければならない課題であろう。

### ◆日韓青年親善交流のつどい

今回、事業の長い歴史の中で、日本青年の派遣に先立って韓国青年の招へいが行われるのが初めてであったという。そこで、韓国派遣に先立って行われた大きなイベントの一つである「日韓青年親善交流のつどい」（茨城県守谷市）に、全日程ではなかったが、中田も参加させていただいた。時期的に多くの大学の試験期間と重なるということで、今回の派遣青年で「つどい」に参加できた者は多くなかったが、参加できた青年にとっても、既参加日本青年との話し合い、招へい韓国青年との交流で多くのことを得られたと思う。同時に、中田自身が、派遣団長として学ぶことが多かった。日韓の青年たちが、様々な発表や共同作業の中で打ち解けていくプロセスを目にすることができた。また、韓国訪問時に本当にお世話になった、韓国側の金団長、徐、安副団長、そして韓国青年とも話をさせていただく機会もあり、自らの派遣に当たって事前の「研修」効果が大きかった。今後、特に韓国青年の招へいが先になる場合には、韓国派遣団長には、是非参加されることをおすすめしたい。

### ◆韓国到着

いろいろな面で、日韓関係改善の兆候がある中での韓国訪問ということであったが、中田自身が、初の韓国訪問ということで、緊張の入国であった。しかし、空港で青少年交流センターのパク課長を始め、コーディネーター、通訳の方々の温かい笑顔の歓迎を受け、ほっとしたスタートであった。



なお、後に知ったことだが、パク課長とは、マレーシアで青年国際交流を担当していた共通の知人がいるということがあって、やはり何か御縁があるのかなと思ったところでもある。

### ◆施設訪問

韓国での日程は、さまざまな角度から、韓国の文化や社会について理解が深められるよう施設が選ばれていた。女性家族部訪問や修練院での体験なども貴重な経験となった。

中には、ひょっとすると外国の人には見せたくないと考えてしまう方もいるのかもしれないが、三洞少年村やヘマルグムセンターでは、厳しい状況に置かれる韓国の子供たちの姿や暮らしの一部を拝見し、日本との相違点を考える機会をいただくとともに、そういう子供たちを支える職員の方々の貴重なお話を聞くことができた。

また、日本語を学ぶ同世代の大学生、高校生との交流。グループに分かれたので中田が個別に見ていない場面も多いのであるが、日本語を学ぼうという同世代の若者との交流は、多くの団員に刺激を与えたのではないかと。韓国青年が案外我々に率直に発言してくれるところも垣間見られて、ある意味安心することができた。惜しむらくは、双方に必ずしも事前準備の期間、情報が十分になかったところもあったようで、団員の中には、直前にほぼ徹夜で準備をしたものがいかせず、悔しい思いをした者もあったようだ。いずれにせよ、派遣中の様々な機会でも、より日本を、自分たちの思いを伝えたいという団員の前向きな姿勢には頭が下がった。国際交流の場面では、さらにいえば、現実の社会では、今あるもの、今できることで臨機応変に、最善を尽くすしかないということも多いのだが、いろいろな思いを抱えつつも、団員たちは、その場で工夫をして大いに「現場力」を発揮してくれたと思う。

その他、大韓民国歴史博物館、独立記念館、西大門歴

史博物館では、最初のオリエンテーションで青少年交流センターのパク課長が注意深く仰っていたように、韓国側の視点からの韓国近代史を見ることができた。ガイドの方の御説明も配慮いただいているように感じた。また、ヨンチョン郡では、統一部の方の御案内の下、第五師団のヨルセ展望台で、依然「休戦」の状態にあるDMZの現状を、そして韓半島統一未来センターでは、統一の未来に向けた教育の様子を見せていただいた。特にヨルセ展望台では、現場で任に当たっている同世代の兵士の方から御説明をいただく場面もあり、団員たちも東アジアの安全保障、韓国の置かれる現状というものの一面を肌で感じることもできたのではないかと。



韓国の現在、過去、未来という点で様々な配慮をいただいた日程であり、重ねて感謝を申し上げたい。なお、今回の派遣においては、韓国の社会課題について理解を深めるということがテーマとされていたということであった。このテーマは、昨年の派遣団の意見を踏まえてということであったが、事前にもう少し日本側と共有されていれば、各施設の訪問時に、日本との違いの意見交換など体験を深めることができたようにも思われる。

### ◆青少年交流会

日本での「つどい」に相当するものとして、韓国側で開かれる青少年交流会。韓国側の既参加青年たちの熱心な準備により、アイスブレイクに始まり、文化紹介、トーク、ディスカッション、ドミノを用いた共同活動など、盛りだくさんの活動が盛り込まれていて、大変楽しく過ごすことができた。二国間交流事業において、招へいと派遣のそれぞれの青年たちをつなぐ非常に有意義な交流の機会となったと思う。



残念ながら一泊二日というタイトなスケジュールであったが、やはり「寝食を共にする」というのは大きな力を持つので、日本同様、二泊三日で実行できればより貴重な体験を得られるのではないかと思う。

なお、特にこの中の文化紹介が、日韓織り交ぜての形で行われたので、それぞれ着替えなどの段取りなどで各団員、実行委員には負担が大きく、ゆっくり相手国の発表を鑑賞するという形がとれなかった部分もあったと思うが、一つのイベントを作り上げるという共同作業になった点では良かったのではないか。最後に皆で輪になって歌を歌うという盛り上げ方も大変良かった。

## ◆ホームステイ

やはり、訪問国の一般家庭にお世話になるホームステイは、国際交流プログラムの一つの柱であると思う。今回、昨年度と同様にシフン市で行われたが、おおむね順調に進められた。本事業では、団長も希望すればホームステイをお願いできるということで、中田自身初の体験としてお願いした。受入れの御家庭にとっては、日本青年一人と、韓国江原道出身の涉外と、ホストペアレントより随分と年上の団長というある意味不思議なトリオで御厄介になった。

お聞きしたところ、お子さんへのいい影響なども考慮してたくさんのホームステイを受け入れているという、ホスト経験の豊富な御家庭で、お子さんも物怖じせず一緒にリビングで過ごしてくれた。ただ、ボディランゲージなどというものの、言葉で表現できないもどかしさを感じるが多々あった。幸いホストマザーは英語の先生でもあるので、深夜まで団員も交えて英語でお話できたのはいい経験であった。ホームステイ明けに集まった団員とホストファミリーの方々の顔を見て安心したのであるが、シフン市の皆様に感謝を申し上げたい。



## ◆最後に

冒頭にも述べたが、我々は三十回目の派遣団ということ強く意識して準備を重ねて派遣に望んだが、今年、先に日本へ招へいされた青年たちを始めとした多くの既参加韓国青年が本当に熱く歓迎してくれた。



そのような、日韓双方の既参加青年の熱い思いがこの事業をより意義深いものにしてきていることを改めて感じた。日本・韓国両政府には、多くの課題に直面することもある中で、青年同士の交流を続けていただきたいと思う。

そして参加青年には、この濃密な経験を消化し、自らの血や肉とする、あるいは客観視して成長の糧とすることは、すぐには難しい部分もあると思うが、折に触れ、振り返る中で、人生を豊かなものにしてくれる大きな財産を持つことができたのではないかと思う。マスメディアやネットでの情報が飛び交う現代社会ではあるが、直接に話ができる、信頼できる友人が韓国にいる、いろいろ葛藤を抱えつつも貴重な体験を共有した友人が日本の各地にいる、これらの大きな財産をいかして、これからの社会でリーダーとして活躍して欲しいという団員へのお願いを述べて筆をおきたい。

## 近くて親しい国を目指して

メ田 祐奈

私は本事業の応募書類であった作文に「近くて親しい国を目指して」というタイトルをつけて応募した。昨年、日韓は国交正常化50周年を迎え、国交正常化当時、両国間の往来は年間1万人程度であったのにもかかわらず、今では年間500万人を超えるとされ、日本への韓国人観光客数は中国人観光客数に次いで2位となった。しかし、日本への韓国人観光客数は増加傾向であるが、日本から韓国への韓国客数は12年ぶりに減少した。人の往来が活発になったとはいえども、内閣府が発表した「外交に関する世論調査」において、日本人の66.4%が韓国に親近感を抱かないという結果であったように、目には見えない何かは両国に間に存在すると考えた。日韓国交正常化50周年のテーマは「共に開こう新たな未来を」であり、未来を築いていくために、次世代を担っていく私たちは何をすべきなのか、何ができるのかという思いを持ち、本事業に参加した。

私は純粋に韓国という国が好きで、両国の関係を少しでも改善したいと考えるためにこのような問いを持ったように思う。私と韓国の出会いは幼少期に通っていた英会話の先生が在日韓国人だったことから始まり、K-POPスターに魅せられ、韓流ブームに乗り、韓国という国に興味を持った。子供の頃はただ無邪気に韓国という国を身近に感じていた。しかし成長していくにつれ、ただの身近な国というわけにはいなくなった。日韓関係という言葉が表す重みを感じ始めたからである。歴史問題、領土問題から生じる反日感情や反韓感情は両国間の歴史認識の違い、文化、政治、教育、心理から生まれるのではないかと考えていた。

今回の事業を通して、「日本に対して、あまり良いイメージはないけど、日本人は好き」という言葉が多く聞かれたように思う。前に独立記念館を別の機会に訪問したときは、韓国、韓国人がどれだけつらい思いをしたかということが展示され、また日本が、日本人が責められているように感じ、中の展示物を見て回るのが心苦しかったことを覚えている。しかし、今回の訪問でガイドの方から展示物を見る前に、「日本が悪いというわけではない。100年前にどんなことがあったのか事実を知るための博物館である」と言われた一言が印象に残っている。前回は友人と二人きりで展示館を回り、展示物や周

りの照明、音に圧倒されてしまい、しっかりと歴史と自分自身が向き合うことができていなかったように思う。今回は前回のようにただ展示館を回り、説明文を読むというわけではなく、ガイドの方に当時の状況や社会情勢などを教えていただきながら、どういう背景があってそのような歴史が生まれたのかというプロセスをしっかりと踏んだ段階的な説明していただけたため、歴史としっかりと向き合って、捉えることができたと考える。今すぐに何かが変わるというわけではないけれど、一つずつ過去に何かがあったのかという事実と向き合って、自分の意見を持てるようになりたいと感じた。

今回は社会問題が本事業のテーマだったということで、韓国が今現在抱えている社会問題に関する施設に多く訪問することができた。今まで私自身、何度か韓国を訪れたことがあったが、そのような施設に行くことは初めてであり、またありのままの韓国の現状を見せていただけたことは大変貴重な時間となった。特に印象に残っているのは、ヘマルグムセンターである。韓国国内の調査によると2012年においては5,540人中12%の生徒がはじめられた経験を持ち、さらにいじめたことがあるのは12.6%であった。いじめられた経験のある生徒のうち4割は、いじめの内容に耐えられないほどに悲惨だったと答えた。また、韓国政府の教育省が4.5万人に対して行った調査では、いじめの63.6%は学校の時間内に起きており、そのうち50%は教室内での休憩時間に行われているとのこと。いじめが行われる理由は特になく、ただ単に面白半分だという。CNNの発表した韓国の若者の自殺率はとても高く、2001年から2011年の10年間に57%増えたとのことで、その自殺の原因の約6割はいじめを苦にしてとのことだった。またいじめを受けた経験のある31.4%は自殺を試みたり、自殺を考えたことがあると答えていた。私は、ヘマルグムセンターを訪問する前に、校内暴力によって学校に登校することができなくなった子供たちを保護し、学校に復帰するためのケアを行っている共同生活型施設と聞き、どのようなスタンスで訪問すればよいのか分からずにいた。しかし、訪問してみると施設の子供たちは私たちを明るく出迎えてくれ、歓迎してくれたために、いつの間にか私自身もいつも通り接していて、少し前までどのように接すればいいのか悩ん

でいた自分が嘘のようだった。一生懸命日本語を使い、施設で行われている授業についてなどを説明してくれ、またオカリナ演奏を準備してくれて、とても感動したことを覚えている。オカリナ演奏を聞きながら、知らず知らずのうちに涙を流していた。一緒に施設を回って見学するときも、この教室ではどんなことをするだとか、この教室で気に入っているところなどたくさんを紹介してくれた。夕食を食べる際も、私の横に座ってと声をかけてくれ、一緒に話しをしながら夕食を食べたことが印象に残っている。日本に対して興味を持っていて、日本に対して多くの質問を受けた。日常的なことから、サブカルチャー、社会問題など質問の内容は多種多様であった。その質問の一つずつ丁寧に答えるように努力し、日本についてよりたくさんを知ってもらおうと心がけた。

今回のプログラムの中で一番印象に残っているのは、一泊二日で行われた日韓青少年交流会である。お互いが親しくなるためのレクリエーションや夜に行われた日韓文化紹介、1日かけて行われたディスカッション、一泊二日では物足りないくらいの濃密な時間を過ごせたと考える。レクリエーションでは体を動かす内容のものが多く、早くチームのメンバーと親しくなれたように思う。また、日韓文化紹介では両国の青年たちが一生懸命練習した成果を存分に発揮し、それぞれの文化を紹介した。またディスカッションでは、両国の青年たちが各自の経験や考えをもとに意見を積極的に述べ、とても有意義な時間を過ごせたと考える。

本事業のプログラム全体を通して言えることであるが、韓国語で説明や案内がされるときには常に日本語の通訳がついており、また日本語で説明、案内がされる場合には韓国語通訳がついていた。しかし、それぞれが理解しようという気持ちを持っていたからか、途中から通訳を介さなくても、それぞれが一生懸命に体と目を向けて話を聞いていたように思う。それを一番感じる事ができたのが、国立中央青少年修練院を表敬訪問した際の太鼓体験であると考え。講師の方が「言葉は通じなくても、心は通じている」とおっしゃっていたように、最初は通訳を介しながら、説明や太鼓のたたき方を教わっていたが、中盤から通訳を介さなくてもそれぞれが次に何を言われるか想像し、また理解しようという気持ちを持って臨んでいたように感じられた。慣れてきたため、そのように予測ができたと考えられるかもしれないが、それでも通訳を介す前に、行動しよう、なんと少しでも聞き取ろうという心構えが生まれたのではないだろうか。たった1時間の太鼓体験ではあったが、それでも体験が始まる前と終わった後では大きな成果を得たように思う。

今回日本代表青年として、また団のユースリーダーと

して韓国を訪問し、19日間の日程を終えた。日本青年代表として接するからには、相手にとって私自身が日本人の象徴であり、私の振る舞い一つ一つが日本のイメージとして捉えられるため、常に気を配っていたように思う。私自身が生まれ育った日本について、交流した人たちに知ってもらうことはとても誇りであり、また今回私たちと交流したことをきっかけに日本に興味を持ち、また少しでも日本語で会話をしようと試みてくれたことが大変うれしかった。また、私個人としてはユースリーダーとしての役割を持ったことで、大変成長できる機会をいただけたと考えている。自分だけではなく、常に周りに目を配り、周りの意見を汲み取り、団が少しでも良くなるよう、その時自分にできた最善の選択をしてきたつもりだ。大変なこともあったけれど、支え合って、困難を乗り越える大切さも学んだ。

「近くて親しい国を目指して、次世代を担っていく私たちに何ができるのか」これが私の本事業におけるテーマであった。今すぐに何かを実行できるわけではないであろう。しかし、今回出会った人たちとの縁を大切に育み、お互いを理解し合おうという気持ちを持ち、接していくことで、ゆっくりではあるが一步步つ明るい未来に向かって、踏み出していけるのではないかと考える。

私が本事業に応募したきっかけは、既参加青年に後押しをしてもらったからである。インターネットで本事業を見つけ、応募しようか迷っていたところ、たまたま友人が既参加青年であったため、話を聞いた。きっと彼女の後押しがなければ、私は今この活動報告書を書いていないであろう。また、今まで日韓の草の根交流は一人でも地道にやっていたのではないかと考えていた。しかし、本事業に参加し、仲間と共に日韓の架け橋になることの意義や大切さを学んだように思う。これからの事後活動では一人でも多くの人に本事業の存在を知ってもらい、私がしてもらったように彼らの後押しをできるような存在になっていきたい。そして日韓の架け橋となる多くの同志を見つけていきたいと考える。

## “あたりまえ”から離れる

日下部 帆南

私は平成28年度日本・韓国青年親善交流事業に参加し、留学や旅行では経験できない貴重な時間の中で、言葉では言い表せないほど多くの学びと気づきを得ることができた。中学2年生のときに韓国語そのものに魅力を感じ、文化や歴史を知るとともに韓国語に親しんできた私は、メディアで伝え知る韓国だけではなく、韓国を自分の目で見て、肌で直接感じる経験がしてみたいと思っていた。また、内向的で自分から何かに本気で向き合い、挑戦したことがなかった自分を変えたいという思いもあった。そのため、大学の韓国語の先生にこの事業を勧められたとき、この事業なら韓国とまっすぐに向き合い新たな挑戦ができると思い、参加を決意した。

事業を通して体験したことはどれも思い出深く貴重なものであったが、この事業の中で特に印象に残ったことを日韓交流と施設訪問に分けて述べていきたい。

はじめに日韓交流についてだが、国際交流の経験がほとんど無かった私にとって、日韓青少年交流会を始め、韓国青年の案内によるソウルツアー、そして始興市ホームステイなどで韓国の人々と直接交流できたことは、とても刺激的で充実した経験となった。一泊二日で行われた日韓青少年交流会では、会場に着いた途端、たくさんの韓国人青年たちが私たちを拍手で歓迎してくれた。簡単なゲームやクイズをしながらお互いに仲良くなった後は、「文化交流の夜」だ。夕食を食べながら、お互いが用意してきたパフォーマンスを見て、最後には皆で手をつなぎ輪になって日韓の有名な歌を歌った。私たちのパフォーマンスはソーラン節や合唱、K-POPダンス、ファッションショーなどを用意した。どれも毎日夜遅くまで何度も練習したものであったので、韓国青年からの大きな歓声をもらうことができて本当に嬉しかったし、皆で一つの舞台を創り上げたことへの達成感も非常に大きいものであった。

ホームステイで私が滞在した家庭はお母さんと娘さん、息子さんのいる家庭で、韓国語しか通じなかったため、最初は上手くコミュニケーションが取れないのではないかと心配していたが、私たちが理解しやすいように、ゆっくりと分かりやすい言葉で説明してくれたおかげで、楽しく会話をしながら交流することができた。旧正月である「秋夕」が間近だったこともあり、秋夕の間に食べる伝統的な食べ物である「ソンプジョン」や、韓国の海苔巻き「キンパッ」を一緒に作った。また、ショッピングモールへ行き一緒にお菓子を選んだり、ユ

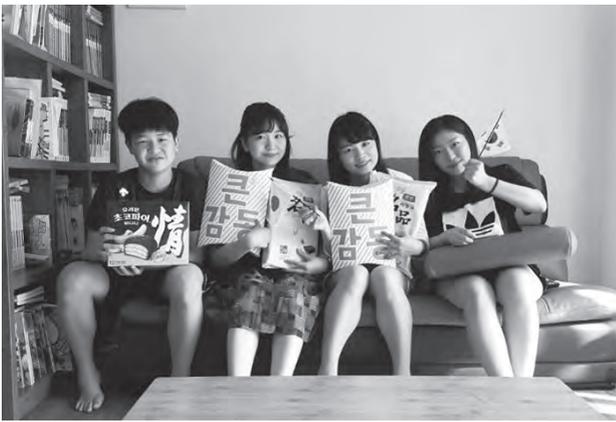


日韓青少年交流会でのディスカッションチーム

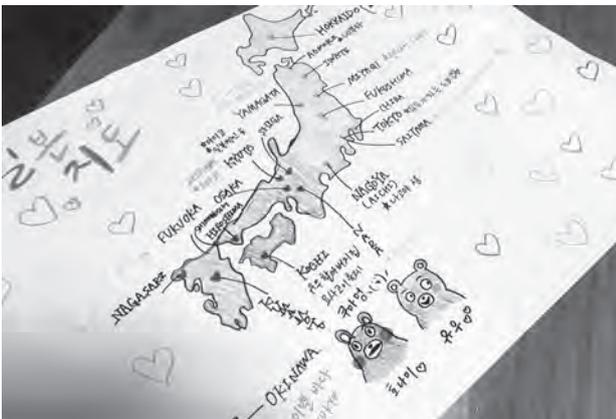
ンノリという韓国の伝統的な遊びを楽しんだりと普段のありのままの韓国の生活を体験することができた。最後のお別れの際に「私たちの娘」といって抱きしめてくれたことは、一生忘れられない大切な思い出である。二泊三日と短いホームステイだったが、同じ家族のように接してくれたお母さん、娘さん、息子さんと過ごした時間は何ものにも代え難いかけがえのないものであったように感じる。

韓国の人々との交流の中で常に感じたのは、韓国の人々の情の深さである。家が遠いのににもかかわらず毎日のようにホテルまで駆けつけてくれたり、手紙やお土産をくれたり、体調を気遣ってくれたり様々な場面で韓国人の温かさを感じた。韓国に友達がたくさんできたことで、私にとっての韓国が今まで以上に大きな存在になった。韓国語そのものに興味を持ち今まで勉強してきたが、言語はあくまでツールとして使っていかなければ宝の持ち腐れであるということを改めて実感した。言葉は使い続けるからこそ、どんどん光り輝いていくものであり、それがたとえ完璧でないものであっても、自分の正直な気持ちを外国の人々に伝えたいという情熱がそこにあれば、しっかりと意味を持ってくれる。今までは韓国語が好きで、ただひたすら勉強を続けていたが、これからは伝えるために学ぶという明確な目的ができたため、今まで以上に韓国語の勉強を続け、韓国語を使い続けたいと改めて感じた。

私は事前研修のときに「日本人として持つあたりまえから離れる」という派遣中に達成したい目標を立てた。同じ日本人同士であっても、考え方の違いに驚かされ



ホームステイ先の家族と一緒に



ホームステイ先で、手作り日本地図を使って日本を紹介

ることがある。ましてや日本人と韓国人とはなおさらだ。全く異なる環境で育ち、同じ歴史事象であっても、私たち日本人とはまた異なる視点で捉えられた教育を受け、文化や慣習も似ている点はあるが、決して同じではない。日本人である私の「あたりまえ」は、私が今まで受け取ってきた環境や習慣の中で自然と形成されてきたものであり、異なる社会的背景で育ってきた者が同じように感じるとは限らない。同じ世界観を共有していない者同士が、同じ対象を見ても、全く異なる認識を持つことができるように、日本人と韓国人の間で見受けられる“差異”は自然であり、あることがあたりまえなのだ。むしろ、私たちの中で感じる様々な差異があったからこそ、私たちに良い刺激を与えてくれ、凝り固まった固定観念や日本人の「あたりまえ」から少しずつ離れることができたともいえる。相手の立場に立って考えることの大切さ、自分のあたりまえを押し付けない姿勢が異文化交流の場では特に求められていると感じた。“違う”ことは理解の妨げにはならない。国が違い、歴史も違うが、一対一で誠意を持って向き合えば通じ合うことができ

る。それは国際交流のみならず、たくさんの人と出会う社会の中で大切にしていかなければならないことだ。違うことを認め合いながら、相手のことを思いやるコミュニケーションをこれからも大切にしていきたいと思う。

次に訪問施設についてだが、今年の派遣事業の大きなテーマが社会ということで、多くの社会問題を象徴する施設へ訪問する機会があった。韓国にも日本と同じように社会問題が多く存在し、それにしっかりと向き合い続けていることを実感した。朝鮮戦争で親を亡くした子供たちを保護するために建てられた施設である三洞少年村では、現在でも親がいない子供たちが安心して暮らせる施設として、子供たちを守り続けている。また、ヘマルグムセンターという学内暴力のために学校に通えなくなった子供たちが心身を休ませながら生活している施設にも訪問した。私たちのために、何度も練習してくれたというオカリナの演奏や日本語での発表を行ってくれて、私たちの訪問を本当に楽しみにしていたのだと思い、心が温かくなった。かつての小学校を再利用した韓国唯一の寄宿型治療センターであり、専門教育プログラムや芸術治療プログラム、体験活動プログラムなど様々なプログラムを提供しながら、子供たちが再び学校生活に戻れるよう支援を続けている。ヘマルグムセンターには、学校でいじめの被害にあったという子供たちが多く、最近ではSNSを通じたサイバー暴力など周囲の人が気づきにくいいじめも多発していると伺い、これは日本の現状とも共通していると感じた。心に傷を負った韓国の子供たちに対し、どう接するべきか、拒まれてしまうのではないかと不安もあったが、とても温かく私たちを迎えてくれ、また、日本に関心を持ってくれている子供も多く、非常に楽しい交流の時間となった。

また、朝鮮半島の歴史を学べる施設への訪問も、私にとって非常に意義深い経験の一つとなった。大韓民国歴史博物館、独立記念館、西大門刑務所歴史館などが挙げられる。これらの施設に訪問し、朝鮮半島の歴史を韓国の視点でしっかり学べたことで、韓国の歴史に日本はいつの時代でも切り離すことのできない存在であり、相互に影響を与え合いながら発展してきたことが分かった。第二次世界大戦時の歴史については、日本が初めて原爆を落とされたことから被害者としての日本の姿が当たり前ようになっていたかもしれない。しかし、実際は決してそのような姿だけが当時の日本の姿ではないということ、これらの施設は物語っていた。原爆で被爆した人々も日本人だけではなく、朝鮮半島を始め、様々な地域から強制連行された人々があり、そしてその日本で亡くなった人々、被爆した人々が大勢いたことは事実だ。また、日本植民地時代に日本に抵抗した人々が収容された西大門刑務所歴史館では、捕まってしまった人々がどのように生活していたのか、どのような拷問を受けてい

たのかを詳しく学ぶことができ、私は歴史の一部分しか知らず、表面的な認識しかなかったのだということを考えさせられた。ガイドの方が「日韓交流や勉強の始まりはお互いの歴史をしっかりと理解すること。これから何をしていくかを考えることは現代を生きる私たちの責任だ。」と仰っていたのがとても印象的だった。知ろうとしなければ見えてこないものがたくさんあり、そのような歴史が信じがたくても、避けては通れない問題から逃げてはいけないと痛感した。過去にあった出来事を知ることは、どちらかの一方的な善悪を判断し非難するためのもではなく、お互いを知る第一歩として日韓交流をより深くしてくれるためのものだと思うので、これから歴史問題にも向き合い、学び続けていきたい。

このような施設訪問を通して、問題や悩みも含めた“ありのままの韓国”を感じ、日本にも通ずる現代社会の普遍的な問題を読みとることができたと思う。旅行者としての視点では知ることのできない視点で韓国を知る。韓国を多角的に知ることができることはこの事業最大の魅力である。一つ一つの訪問先には、日本青年代表である私たちに、感じてほしい、学んでほしい、そして日本に伝えてほしいという韓国からのメッセージが込められているように思えた。私たちが訪れる場所には、必ず、私たちが訪れることになった理由と意義がある。そして、私たちはそれに答えなければならない。そのため、事後活動では施設訪問での学びをしっかりと伝えていこうと身が引き締まる思いがした。

また、この事業はチームで動く機会が非常に多いことも特徴であった。全く異なるバックグラウンドを持った個性溢れる仲間と意見を交わすことができたことは、今まで思いつかなかった新たな視点を知ることができ、非常に刺激的なものとなった。困難な状況を共に乗り越えてきた仲間の存在はかけがえのないものであり、この派遣活動の中で最大の宝物のように思う。集団での行動は決して楽なものではなかったが、私に大きな気付きを与えてくれた。様々な面で優秀で能力の高い仲間と生活する中で、自分の欠点を再認識し、その中で私に何ができるのか、私なりの団への貢献の仕方を模索する日々であったが、私自身が気付かなかった私の長所や、事業を通しての成長に気付かせてくれたのも仲間の存在があったからであった。仲間を通して、自分自身を見つめなおすことができたのも、この事業を通して得た大切な気付きである。

この事業は、他の国際交流プログラムとは決定的に異なる面がある。それが“日本代表”として参加させていただという立場があることだ。特に、韓国の中央行政機関の一つである女性家族部や在大韓民国日本国大使館公報文化院への表敬訪問など、日本青年代表という立場であるからこそ経験できたことは多々ある。日本

青年代表として、私たちが学んだことは私たち自身のためだけではない。知って、学んで終わりなのではなく、そこからどう考え、自分の意見を持ち、伝えていくのが重要である。それだけの経験をさせていただいている以上、私たちが得た学びを日本で伝えていく責任があるように感じている。そのために、日本青年国際交流機構での事後活動や日韓交流連絡会議への参加、大学での広報などを進めていき、この貴重な経験を楽しかった思い出だけで終わらせず、私に出来る限りの活動を続けていきたい。

# 思い込みと現実

諏訪 哲広

## はじめに

「韓国」という言葉を聞くと、どんなイメージを思い浮かべるだろうか。日本に旋風を巻き起こした韓流ブームから連想されるドラマや音楽、辛いが癖になる韓国料理、美容大国を象徴する化粧品。あるいは、昨今の慰安婦少女像問題や竹島問題を思い浮かべるかもしれない。日本人一人をとっても、韓国に対して良い印象を持つ人、悪い印象を持つ人、様々である。実際、私の身の回りにいる人々の多くは韓国に対して良い印象を持っていない。これはおそらく、テレビやニュースなどのメディアで見る韓国の姿に良い印象を抱いていないからである。今回、私はこのような韓国の悪い一面ばかりを捉えてしまっている人たちに、韓国には良い一面もあるということをしかりと伝えられるよう、韓国についての理解を深めようと考え、日本・韓国青年親善交流事業への参加を決意した。

このプログラムに参加して、言葉では語りつくせないほどの多くの体験をすることができた。韓国の政府機関である女性家族部や在韓国日本国大使館公報文化院への訪問、韓国の青年と一泊二日寝食を共にした文化交流、二泊三日のホームステイ。他にも、旅行などでは訪問できないような様々な施設に行き、得難い体験をした。これらの経験の中でも、特に私の心に残った三つの場面ここに綴りたい。

## 歴史

本事業に参加するに当たって、私は韓国から見た日本の歴史を学びたいと思った。なぜなら、日本と韓国の関係を悪化させている根源が、歴史認識や解釈によるものであると感じていたからだ。事業に参加する前にも、大学で韓国の歴史、特に「韓国併合」について学んだことがある。韓国併合を調べる糸口として、私はまずYouTubeで韓国併合という言葉を検索してみた。上から8個目までの動画がすべて韓国併合に関するものだったので、私は片っ端からその動画を見た。すると驚くべきことに、どの動画も、教科書などに書かれている客観的な歴史を述べているのではなく、「日本が韓国を近代化させた。なぜ韓国は日本に感謝しないのか。日本は本当に100年間も恨まれ続けなければならないのか」など

の韓国併合を肯定する意見しかなかった。私はこの結果に啞然としてしまった。それと同時に、そこから気が付いたことは、どの動画の内容も日本からみた一方的な解釈で、韓国の真の歴史を踏まえていないということだった。このような背景に、私は韓国から見た日本の歴史を知って、この動画の内容が説得力を持ったものなのかどうかを検証したいと考えた。

今回、韓国の歴史を学ぶために独立記念館と西大門刑務所歴史館を訪れる機会があった。ここでは、独立記念館での出来事を主に述べたい。独立記念館はその名の通り、第二次世界大戦後、韓国が日本から独立したことを記念し1987年に開館したものである。そこでは、日本語が堪能な韓国人のガイドが施設内を案内してくれた。韓国から見たありのままの日本の歴史がどのようにこの場所に綴られているのか、緊張しながら構えていた私たち日本人に、ガイドは前もってこう言った。「日本人だからといって恐縮したり、辛く思ったりする必要はありません。皆さんにはありのままの歴史を学んで、今後の日韓関係改善のためのヒントをつかんでもらいたいです」一字一句正確な言葉ではないかもしれないが、このような趣旨を私たちへ伝えてくれたことは、私の胸に今でも深く残っている。なぜなら、日本人に韓国から見た日本の真の歴史を学んで欲しいというメッセージを、韓国側からも感じる事ができたからだ。その言葉を胸に、私は説明を聞き漏らさないように、集中して聞いた。説明の中で、日本が強いていた過酷な韓国の植民地支配時代



独立記念館でガイドの説明を聞く

や、それに抗おうとして立ち上がり、独立の狼煙を上げた韓国の英雄たちの歴史があることを知った。どの内容も、日本の学校の教科書では学ぶことができない、日本の歴史だった。私はこの歴史を目の当たりにし、韓国併合を捉え違えている人たちは、特にここに来て日本の歴史を学ぶ必要があると感じた。この体験により、私は日韓の歴史認識が食い違う大きな原因が、ここに潜んでいるのではないかと考えた。この重要な日本の歴史を学んだ一人の日本人として、この事実を周囲に広めたい、この現実を知らずに「思い込み」で韓国を捉えている人たちの認識を改めたいと強く思った。

## 韓国青年

このプログラムでは、多くの韓国青年と交流する場が設けられていた。三洞少年村という戦争で親を亡くした男児を保護する施設や、ヘマルグムセンターという学校でいじめにあった少年を保護する施設への訪問、韓国随一の進学高校である大元外国語高校や水原大学への訪問、そして韓国派遣団代表の青年とのレクリエーションやディスカッション、ソウルツアーなどを通じて交流を深めた文化交流。どの交流も、この事業でしか経験することのできない、貴重なものだった。その中でも、特に印象に残ったヘマルグムセンターでの出来事を述べてい。ヘマルグムセンターへと向かうバスの中、私たち日本派遣団は「(このセンターの目的を踏まえると)あまり陽気な子たちではないかもしれないから、向こうの青年に合わせて交流しよう」という話をしていた。実際にセンターへと着くと、彼らは私たちを温かく出迎えてくれた。彼らの表情を見てみると、どの子も笑顔で楽しそうにおしゃべりをしていた。この施設での交流は、お互い出し物をした後、簡単なレクリエーションをし、一緒に夕食をとるといったものだった。最初に、韓国側が歌とオカリナの演奏の出し物を披露してくれた。オカリナの音を聞いた瞬間、私は鳥肌が立った。日本語を習っているわけでもない彼らが、日本の曲である「千と千尋の神隠し」の主題歌を演奏し始めたのだ。きっと私たち日本派遣団が来ることを知って、たくさん練習をしてきてくれたのだろう。そう思った瞬間、私は胸が熱くなるのを感じた。彼らの素晴らしい出し物が終わり、次は日本青年の出番だった。私たちの出し物は、みんなで作った日本紹介ムービーを見もらった後、ソーラン節を踊り、嵐の「Happiness」を歌うというものだった。バスの中での彼らに対する心配事を思い出し、私たちはおそろおそろ出し物をやってみた。しかし、実際に日本紹介ムービーが流れ出すと、彼らの反応は予想外だった。興味津々で皆楽しそうに見てくれていたのだ。それだけではなく、ソーラン節を踊った時は一緒に踊り、Happiness

を歌ったときも、まるでライブの観客のように一緒に歌ってくれていた。普段感動することは滅多にない私に、そのような彼らの姿を見て、嬉しさのあまり気持ちがあふれる様な思いに駆られた。この時も、事前には「きっと陽気ではない子たちだろう」という「思い込み」で彼らを判断しようとしていた。しかし、現実とは全く異なり、誰よりも自分の気持ちに素直で明るい子たちであったことを、この経験を通じて知ることができた。



ヘマルグムセンターでレクリエーションを通して交流する

## 日本青年

ここでの経験は、韓国に関する様々な体験をし、それに伴う見識を養うことだけに留まらない。日本全国から選考を勝ち抜いてきた意識の高い青年たちと約1週間の事前研修、19日間に及ぶ出発前研修、韓国訪問、帰国後研修の期間を一緒に過ごすことのできた、貴重な機会でもあった。年齢も出身も異なる30人が集まったせいも、個性あふれるメンバーたちがそこにはいた。韓国語が堪能な人もいれば、人の前に出て仕切るのが上手な人、ムービーを作成するのが上手な人など、様々であった。そのような個性あふれるメンバーがいる団の中で、個々人が「自分は団のためにどのような貢献ができるか」を考え、実践していく。青年が自分の役割を見つけ、誰もが活躍できる、そんな場でもあった。その団の中で私はどのように貢献できるかを考えたところ、数少ない三人の男子の内の一人居てもあったことから、「団を全力で盛り上げる」という役割が頭に浮かんだ。この言葉には、ソーラン節を踊ったり、歌を歌ったりする際に、男子が率先して皆を引っ張り、そして一人も孤独な思いをしないよう、団員の全員と向き合い、調和を図り、全員で団を盛り上げられる雰囲気を作る、という私なりの意味合いを込めてみた。すべてが完璧とまではいかなかった

が、個人的にはこの役割を果たせたのではないかと思う。団員の皆がその評価に対してどう思うかは分からないが、結果的にソーラン節も歌も韓国青年に感動してもらえるほどに仕上がりに、孤独な思いをしている団員もいなかったように思えた。また、団員全員が本事業に参加して良かったと言っていた。私自身も、本事業に参加し、自分の成長を実感することができ、意識の高い青年から多くの刺激をもらい、より積極的な自分になろうと思うことができたので、この出逢いと機会に数え切れない程の感謝をしたい。



文化交流でソーラン節を披露する

を見送る際に、「違う国同じ心」と書いた紙を手に持っていた。同じ心を通わし、お互いのことを理解し合えた私たちならば、日韓の明るい未来を一緒に築いていけるはずだ。そのために、彼らとの関係をこれからも大切にし、日韓の友好の輪を少しでも広げていきたいと思う。

## おわりに

日韓が抱える問題の中に、「歴史」がある。また、両国最後に、本事業の意義について述べたい。過去から現在にかけて、日韓の問題は様々存在し、未解決のものや解釈が異なるものが多い。故に、国レベルでの利害関係の一致は言葉で表す以上に難しいように思われる。では、日韓はこのまま関係が悪化する一方なのか。本事業のタイトル、「日本・韓国青年親善交流事業」はその名の通り、日本と韓国が親しんで仲良くし、交流することを意味する。実際、多くの韓国人とそのような交流をすることができた。その結果、私たちは何を得たか。恐らくそれは、国レベルでは分かり合えない日韓を、民間レベルで寄り添えるようにし、そこでお互いの状況や文化、その国の現実をみて理解することができたことだろう。私自身も、韓国の友人と仲良くなるにつれ、彼らのことを理解できるようになった。彼らと接していて一番感じたのは、日本人であろうが韓国人であろうが、友情において国は関係ないということである。同じような話題で盛り上がり、同じ趣味で気が合い、同じ心で通じ合える。このことに気付いていた彼らは、空港で私たち

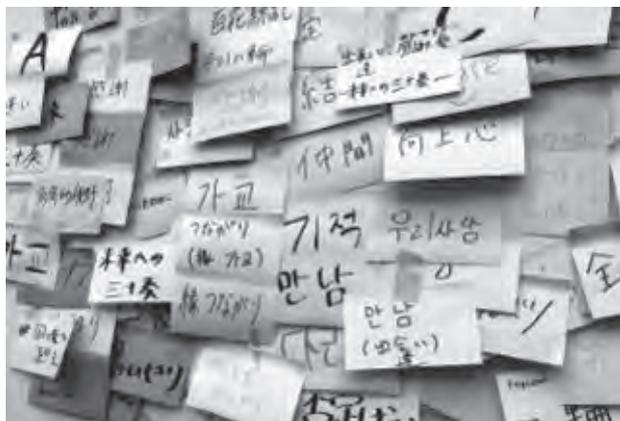
# 派遣を終えて感じたことと今後について

中尾 有希

## 出逢いに感謝・愛<sup>カムサラン</sup> ~未来への三十奏~

「出逢いに感謝・愛~未来への三十奏~」これは平成28年度日本・韓国青年親善交流事業日本青年韓国派遣団のスローガンだ。日本・韓国青年親善交流事業は今年で30年の節目を迎えた。この派遣がなければ出逢うことのなかった30人のメンバー。これまでの歴史が積み重なることで実現する今回の派遣。すべての奇跡に感謝（カムサ）し、今度は私たちがその愛（サラン）を受け継ぎ、未来へつなげていくという思いが込められている。また、本来は三重奏と表記されるところを三十奏としたのは派遣団員30名、日本・韓国青年親善交流事業30周年にちなんでいて、30人それぞれの音色を重ね一つのハーモニーを奏でるという意味がある。

このスローガンができるまでにとっても時間がかかったことを覚えている。団員のほとんどは7月の事前研修で初めて顔を合わせた。今回の派遣に対してそれぞれの思い、目標を抱いていたがそのすべてをスローガンに込めることは難しいことだった。付箋紙に案を書き出し、それを一枚一枚壁に貼り出して整理した。案が出揃った壁を見たとき皆の派遣に対する思いが目に見える形で伝わってきて気が引き締まると同時にすばらしい派遣事業になるだろうという期待を覚えた。そして数え切れないほどの案の中から出逢いに感謝・愛~未来への三十奏~というスローガンが生まれたのだ。



付箋紙に書き出した案

## 派遣前の思い

私がこの事業を知ったきっかけは既参加青年である友人が事業への参加を勧めてくれたことだ。以前から韓国の文化・歴史に興味があったこと、観光では見ることでできないディープな韓国を見たいという思いからこの事業への応募を決意した。

7月4日から9日まで東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで最終選考を兼ねた事前研修があった。そこで初めて30人の団員と顔を合わせた。北は北海道から南は沖縄まで、住んでいる場所も育った環境も異なる団員たち。多種多様なバックグラウンドを持っている団員たちとの出逢いはとても刺激になった。事前研修で団員と接してみて私は自分の未熟さを思い知った。経験、知識、語学力など多くの面で他の団員より劣っている部分が多かったのだ。また今回の韓国派遣団の中で専門学生が私一人だけだった。他の団員との学歴の差を指摘され劣等感や疎外感を感じ、団員との接し方に戸惑うこともあった。しかし韓国派遣団としてチームで活動するには相手を理解する気持ちやチームワークが大切だ。事前研修の限られた時間の中でどのように団員と打ち解けるか考えたとき団員との共通点が少ないこと、自分が他の団員と同じレベルに追いつくことが自分にとってプラスになるということに気が付いた。そして相手を理解すると同時に自分を知ってもらうことを意識した。私は富山県出身なので富山の魅力や方言を教えたり今までの自分の活動や体験を話したりした。その後は団員との距離が少しずつ縮まり、始めのころに感じていた劣等感も自分の原動力に変わった。優秀な団員たちと接したことで自分も負けていられない、頑張らなくてはという強い思いに駆られた。私は事前研修前から『韓国に対して理解を深めるとともに日本を見つめなおす』という目標があったが、このとき私の目標に『自分の弱点に向き合い自分の壁を越える』という新しい目標が加わった。

## 派遣プログラムについて

### ◇三洞少年村

三洞少年村は朝鮮戦争で親を亡くした子供たちのために設立された施設で現在は64人の男子が生活している。私たちは園長に施設を案内していただいた後、2班に分かれ日本のお菓子作りと施設清掃のボランティア活動を

行った。お菓子作りと清掃を終えた後は日本文化の紹介としてソーラン節と歌を披露し日本のお菓子を食べ、短い時間ではあったが子供たちと交流を行った。三洞少年村はたとえ親がいなくてもしっかり勉強し、たくさん遊び、子供たちが兄弟のように共に成長できるシステムや設備が整っているように感じた。またこの施設は一般の児童の出入りも自由だ。施設訪問中、男子向けの施設でありながら女子児童を何人か見かけた。その理由はこの施設が地域の児童向けに学習教室を開いているからである。孤児院で地域児童向けの学習教室が開かれているという話は私自身初めて聞いたし、日本ではあまり行われていないことではないだろうか。この学習教室は施設で暮らす子供たちが施設外に暮らす子供たちと活発に交流できる場になり地域の子供たちにとっては気軽に通える学習の場となる双方にとってとても良いシステムだと思う。孤児院というと閉鎖的なイメージがあったが三洞少年村は開放的で地域に根付いた施設だという印象を受けた。

また三洞少年村でとても印象深かった場面がある。施設案内の際、階段を登りながら壁に飾られた絵を見ていたとき施設の職員の方が「この絵は施設の子供たちが描いた絵です。賞をもらった絵などはこのように飾ってたくさんの人に見てもらえるようにしています。」と誇らしげに穏やかな表情で説明してくださった。何気ない場面だが施設職員の方の子供たちに対する愛情に触れた瞬間だった。

#### ◇ヘマルグムセンター

ヘマルグムセンターは校内暴力のために学校に通うことができなくなった中高生を支援するために廃校となった小学校を利用して開かれた施設で30人が寄宿生活を送ることができるようになっている。ここではセンターの概要説明を受けた後、互いにパフォーマンス披露を行ったりゲームを楽しんだりした。夕食を共にしてセンターの生徒と交流する機会もあった。センターで生活する生徒は校内暴力の被害を受けたとは思えないほど明るい性格の子から感情がうまく表現できない子まで様々だった。しかし共通して言えることは本当にいい子たちだということだ。自身が心の痛みやつらさを経験しているからこそ他の人の何倍も気持ちの変化に敏感で、よく気遣いができ人に優しく接することができる子供たちだった。

今回の韓国派遣のプログラムでは三洞少年村、ヘマルグムセンターなど韓国の社会福祉施設を多く訪問した。三洞少年村やヘマルグムセンターの子供たちと交流し韓国の社会福祉の現場を実際に見たことは日本の社会福祉の現状について改めて考えるきっかけとなった。韓国について深く知りたいという思いで参加した事業だが思った以上に日本について考えたり見つめなおしたりするこ

とが多かった。また今まで関心を持っていなかった分野に目を向けるととても良いきっかけになった。

#### ◇日韓青少年交流会

韓国青年に温かく迎えられ一泊二日の日韓青少年交流会が行われた。始めは緊張していた団員たちもレクリエーションと一緒に食事することを通して徐々に韓国青年と打ち解け交流会が終わるころには別れがつかく感じるほど仲良くなった。文化交流の夜では日韓両国の青年が準備してきたパフォーマンスを披露し合った。それぞれ時間をかけて準備してきたパフォーマンスだけあって両国ともとても見応えのあるすばらしいパフォーマンス披露だった。文化交流の夜の最後には参加者全員が手を取り、輪になって日韓両国の歌を歌った。日韓両国の青年が一つになったこの瞬間、今までの日韓の溝を私たちが埋められるような気がした。ただ交流を楽しむだけではなく、日韓両国の親善がこの先途絶えることなくずっと続くこと、日韓の新しい未来への希望が感じられるような時間だった。

#### ◇ホームステイ

ホームステイ中、私は本当にたくさんのことを体験した。一言で表すならたくさんのもので作った二泊三日だった。チヂミ、キンパブ、キムチなどの韓国料理をお母さんに教えてもらいながら一緒に作ったり家で簡単にできる染物をしてハンカチを作ったりした。

ホームステイ先の家族は本当に優しい方々で滞在中とてもよくしていただいた。初めてお母さんと会ったとき「私のことはオンマ（お母さん）と呼んでね」と優しく言うてくださり、本当の家族になれたようでとてもうれしかったことをよく覚えている。残念ながらお父さんとはあまり一緒に過ごす時間がなかったがホームステイ一日目、夜遅くに仕事から帰ってきたお父さん、お母さん、同じ家庭にホームステイした団員と一緒に夜更けまで話をしていたことが記憶に深く残っている。将来やりたいことはあるかと聞かれたとき、「将来の夢はあるけれど今は事情があって自分のことだけを考えられる状況ではないし、夢を叶えられないかもしれない」と答えた私にお父さんが伝えてくれた言葉がずっと忘れられない。「お父さんは若い人に伝えたいと思っていることがある。若い人にはもっと自由に生きてほしい」「有希は今大変な時だけど誰かのために自分を犠牲にしなくてもいい。周りの人に助けてもらってもいい。まだ若いのだから今は自分を犠牲にしないで自由に、自分が思うように生きてほしい」この言葉は派遣プログラム中に人にかけてもらった言葉で最も印象的で心に残った言葉だ。人生の先輩として後悔のない道に導いてくれようとするお父さんの人生の重みもつまった言葉だった。

## 派遣を終えて

『韓国に対して理解を深めるとともに日本を見つめなおす』、『自分の弱点に向き合い自分の壁を超える』という目標は自分なりに達成できたと思う。

派遣のプログラムを通して自分が知らなかった韓国の一面を知り、韓国の方々と一緒に過ごすことで韓国についてより興味・関心が深まった。また、私は人前で発言することが苦手だが派遣中は何度か人前で発言する機会を得た。緊張したが、やってみるとなんとかなるもので、自分ができないと思っていただけでやればできるといふことに気がついた。今まで自分ができないという壁をつくって逃げていただけだったのだ。そして、できないと思っていたことができたことでこれから色々なことに挑戦していこうという意欲がわいた。

日本・韓国青年親善交流事業に参加する前までは語学力などにコンプレックスを感じていて国際交流事業に参加することをためらっていたが派遣後は早く次の活動がしたくてウズウズしている自分がいた。私は韓国から帰国してすぐ富山県のIYEO（事後活動組織）で海外青年の受け入れをしたが、そこではいろいろな人との出会いがあり、すばらしい経験ができた。派遣事業が終わったらそれで終わりではなく、韓国への興味から始まった私の国際交流活動は今始まったばかりだ。これから先、何十年も国際交流事業に携わっていけたらと思う。



日韓青少年交流会にて